

Player Handouts

補遺: プレイヤー資料

(日付)

本遺言書は、サイラス M. マクリンドルの
認証付遺言書である。

私、サイラス・マクリンドルは、
すべての不動産、動産、株、現金口座を
わが唯一の肉親である甥／姪

【ここに探索者名を入れる】に遺贈する。

(署名) サイラス・マイケル・マクリンドル

(証人) ロウェナ・ピーターズ

E. E. ソールトンストール弁護士事務所

(証人) ドーシー・ティール

E. E. ソールトンストール弁護士事務所



World-Wide Telegraph

The Globe in Seven Minutes

CAIRO

VANCOUVER

HONOLULU

MEXICO CITY

LONDON

MELBOURNE

BERLIN
ROME
BUENOS AIRES

マサチューセッツ アーカム」

サイラス マクリンドルドノ」

ダーカス マクリンドル ダッソウセリ」

ネンノタメ ジモトケイサツヘ ホウコク サレタシ」

ドクター アブナー ハリソンヨリ」

グリーンウッド ウィスコンシン シュウリツビョウイン

CAPE TOWN
NEW DELHI
MANILA

SAN FRANCISCO

HOME OFFICE: NEW YORK

CHICAGO

WWT makes good-faith effort to receive, transmit, and/or deliver all communications, but can share no responsibility for incomplete, inaccurate, stolen, misconstrued, missent, or missing communications, whether by negligence, mistake, conspiracy, error, war, or act of God.

(サイラス叔父の蔵書 プレイヤー資料2)

ウィスコンシン州 グリーンウッドの虐殺事件

精神異常者が5人を殺害

本日、ウィスコンシンの人々は同州グリーンウッド付近のマクリンドル農場で起きた恐ろしい惨劇のニュースに驚かされた。警察は通報を受けたが、駆けつけた時にはすでに遅く、事件を未然に防ぐことはできなかった。当地ではよく知られた一家のうち三代にわたる五人のバラバラにされた遺体が発見されたのである。警察が聞き込みに基づいて捜索した結果、同日夕刻、一家の六番目の家族ダーカス・マクリンドルを残忍な殺人のかどで逮捕した。

——『シカゴ・トリビューン』紙

(サイラス叔父の蔵書 プレイヤー資料3)

グリーンウッドの殺人鬼、 逮捕監禁さる

迅速な裁判が見込まれる

警察は入念な尋問の末、ダーカス・マクリンドルを「グリーンウッド虐殺事件」の名で知られるようになった事件の単独犯人として告発した。郡検察官は迅速で公正な裁判を行なうと約束し、「このような残虐な事件に匹敵するのは、一時代前の血なまぐさいインディアン戦争くらいのものだろう」と述べた。

警察は本日遅く、あと二人の家族も殺害されている可能性があると発表した。警察によれば、ダーカス・マクリンドルは家を襲って五人を殺す前に、サイラス・マクリンドルと幼児一人も殺した可能性があるということである。二人の遺体の捜索はすでに始まっている。記者の個人的見解だが、マクリンドルが精神異常でもないかぎり、死刑執行人と州療養所との間の駆け引きは必要ないと思われる。マクリンドルのような悪魔は必ず死刑に処せられるはずだからである。

——『シカゴ・トリビューン』紙

(サイラス叔父の蔵書 プレイヤー資料4)

私は君が幼かったころから今まで、君を守るために恐ろしい真実を君に伝えないできた。

しかし真実を伝えることだけが君を守ることになる時期が来たようだ。

一世代前のことになるが、わが一族に悲劇が起こった（わが一族とは、ウィスコンシン州グリーンウッドのマクリンドル家である）。君の父オーウェンは立派な人物で、わが一族に伝わる書物の正当な守護者であった。しかしその役目は無事には済まなかった。彼の弟である悪意に満ちた邪悪な男ダーカスがその書物を欲しかったからである。

ダーカスはかねてより異常な教養に染まって常軌を逸していた。権力を渴望するあまり、君の父の信頼を裏切り、君の家族を殺してしまった。君も殺される場所だったが、私はどうにか君を惨劇の場から逃れさせることができた。わが子同様に育ててくれる里親を見つけ、その家族に君を託した。しかし私には君以外にも守らねばならないものがあつた——問題の書物である。私は書物を持ち出し、ここアーカムにやってきた。ミスカニック大学の近辺によくいる変な爺さんの一人として、世を忍んでひっそりと暮らしてきた。

わが一族は何百年の間、これら禁断の知識を守護してきた。伝説によれば、秘儀とパワーを伝えるこれらの書物は、間違つた者の手に渡れば人類を取り返しのつかない運命に導くことのできるものだという。

この書物の内容をあえて学ぼうとした者はダーカス以外誰もいなかった。私はそれらの書物を屋根裏部屋にある小さなインド製のカーベットの下に、他の古い本と一緒に隠しておいた。それを見つけたなら、お願いだから決して読むようなことはしないでいい。なぜ書物が破壊されずに残ってきたのか、そのわけは誰も知らない。たぶんこれらの書物には何か特別な未解決の運命が課せられているのかもしれないし、わが一族そのものが特別な運命を背負っているのかもしれない。これらの書物は大きな邪悪を行なうパワーを持っているが、同時に、邪悪を破壊する鍵も秘めているのだ。

『偉大なる書の我が解釈』は濃紺色の薄汚れた布張りの本だ。タイトルが表紙に印字されている。数百ページの本だ。

『怪物とその眷族』は緑色の皮の背表紙に、はげかった金箔の小さな文字でタイトルが書かれている。摩耗の度合いのひどい本だ。まだらに変色しているところからみて、水によるダメージを受けているようだ。背表紙も中のページも多くの部分がネズミにかじり取られており、のりやどりの部分がすっかり傷んでいるので、バラバラになっているページを小包のようにヒモでしばっておかなければならない状態だ。

エドウィン・フィッシャー記の『クタート・アクアディンゲン』（1783年）は、エリザベス朝様式の草書体の手書きの本だ。会計士の元帳の中に書かれている。表紙の内側に挟まれている紙に本の題名と執筆者名が書かれている。

〈題名のない本〉は謎の本だ。これも手書きだが、見たことのない言語で書かれている。一族に言い伝えられているところによれば、これは地球には存在しない言語だということだ。興奮して走り書きしたような不完全な文字は常に謎だった。本にはブロンズ製の留め具と錠がついていて、錠をかければ開かないようにすることができる。しかし錠をかけるための鍵はついていない。ダーカスはこの本を読む手段を見つけたと言っていたが、彼は人殺しであると同時に大うそつきでもあるから、それもうそだと思う。

これからは君が守護者だ。これらの書物を持っていることは、決して他言してはならない。われわれの義務はいたって単純だ。書物を保存することなのだ。われわれの知られざる敵は非常に恐ろしいヤツで、決して休むこともなく、決して譲ることもないヤツだという。書物を守護するために、どんなときも気を抜いてはいけない。どんな事があってもうたえてはいけない。マクリンドル家の使命が受け継がれ継続されていくことを、草葉の陰から心より願っている。

叔父サイラス

P.S. ダーカスはウィスコンシンの州立療養所に入れられている。現在50歳くらいになっているだろう。ダーカスと連絡を取るようなことはしないように。もし彼が病院を脱走するようなことがあった場合、それを軽く見てはいけない。いちばんいいのは書物を隠して、彼に勝手に探させるのがいい。言い争いにでもなれば、彼は残忍な殺人も辞さないだろう。

（サイラス叔父の蔵書 プレイヤー資料5）

アーカム上空に火の玉

宇宙からの訪問者、わが町を驚かす

モリス・ピリングス博士、
ミスカトニック大学天文学科

昨夜午前1時15分ごろ、アーカムに珍客が訪れた。火の球だ。大気の中を燃えながら通過し、大地に到達できるだけの大きさの隕石である。遠くポートランドやフラミンガムからも炎を上げるその軌道を観察したという報告があった。

われらが訪問者は自ら証拠を残してくれたかもしれない！ それをどうやって見つけられるかは、この記事を読み進めてほしい。

「隕石を目撃するという幸運に恵まれた人々は、それが玄妙な緑色と金色の混じった炎であったと述べている。笛あるいは風が吹くようなシューツという低い音を聞いた人もいる。ナシュワに住むある人は、遠くで爆発するような音を聞いた。

火球、一般的には火の玉と言われているものは、普通は地球の表面に近づくと分裂してしまう。非常にまれではあるが、大きさとスピードが十分ある場合、地表に激突して大きな穴（クレーター）を残すことがある。

そうやって形成された非常に大きな穴の一つが、アリゾナ州ウィンスローの近くにあるものだといわれている。読者の方々には、1913年に現れた大きな火の玉を覚えている人もいるだろう。サスカチュワンからバーミューダ島へ至る軌道上で分解してしまったのが目撃されたものだ。

多くの隕石が地球に落ちて来るが、地球を取り囲む大気との衝突による揺れや摩擦に耐えて生き延びることができるものは珍しい。とは言え、生き延びることができた隕石は、太陽系やその歴史に関してわれわれに重要な科学的知識をもたらしてくれる。

火の玉ハンター募集

私は昨夜の火球の破片の搜索隊を組織している最中である。二度手間を省くため、そして特別な指示に従う必要から、火球を探したい市民は個々に行動せずに、ミスカトニック大学天文学科の私に連絡してくださるようお願いする。特に、自動車をお持ちのボランティアの方の参加を歓迎する。

火球の残骸を見つける作業は、そのスピードが重要だ。というのは一時間経過すること、地球の自然環境による汚染の可能性が増すからだ。ボランティアには、隕石の破片を見つける方法や、搜索すべき地域が指示されている。二度手間を避けるためだ。

発見された隕石は、ミスカトニック大学で展示されるが、名誉はすべて発見者に与えられる。私は最近、オーストリアのウィーンにある自然科学博物館の収集を見て来たが、このようなものがあることは、町と大学の誇りになるものなのだと痛感したばかりだ。

（野生の丘 プレイヤー資料1）

キャンプ中の学生、 行方不明

ミスカトニック大学の学生リチャード・カーディガンは今日になってもしまだに行方不明である。当局は彼がキャンプ中事故に遭ったものと推測している。

一緒にキャンプをしていた友人のヘンリー・アトウォーターは、日曜日の朝早く、アーカム西部の道路をうろついていたところを保護された。彼は記憶喪失にかかっており、現在入院中だ。

二人の若者は木曜日にアーカムを出発し、土曜日には戻る予定になっていた。

警察はキャボット・ロードの北西800mの川辺でキャンプの跡を発見したが、リチャード・カーディガンの姿はなかった。その日の搜索は激しい雷雨のために中断された。警察とボランティアによる搜索は、明日再開される予定である。

なお、さらにボランティアを募集中だ。参加者は、夜明け後にキャボット・ロードのはずれに集合すること。キャボット・ロードはアイルズベレイ街道から北へ分かれる道で、アーカムから北西へおよそ5kmのところにある。

アトウォーターの状態

身体的には健康だが、記憶喪失にかかっており、現在アーカム・サナトリウムに入院している。医師たちが懸命に治療にあっている。

警察は彼がまもなくさらに詳しいことを話せるようになり、行方不明中のカーディガンの所在を突き止めることができることを期待している。警察では、二人の若者が金曜日の夜落雷に打たれたのを見ており、カーディガンも重症、あるいは致命傷を負ったのではないかと心配している。

—『アーカム・ガゼット』紙

（殺人リスト プレイヤー資料1）

『イーサン・ウィリアムズの随想録』(抜粋)

1814年11月16日

ビショップの記憶がまだ私を悩ませている。わが仲間は、わがはい以外は全員死んでしまった。ビショップはまだ封じ込められているのに。

わがはいは再びボウアン橋を見に行き、われらがあそこで行ないし仕事ぶりを確かめてみた。柱はしっかりと立っており、ノミで石に刻みし印も無傷にして鮮明であった。

にもかかわらず、わがはいは来たる年月を恐れている。われらが子孫に対するサーモン・ビショップの大いなる呪いと復讐を恐れるがゆえだ。また、われが神の審判を受けらんとき、あの魔術師を封じるために使った呪文のことで、いかほどの厳しき審判を受けることになるのか。それを思うと恐ろしい。彼の『カルナマゴスの本』を奪いしはわがはいであり、われがあの力を呼び出さなければならなかった。さような力を扱ったわが心は汚れてしまい、奇妙なること、異国なること、暗きことすべてを恐れるようになってしまった。恐れがあまりにも強過ぎ、あの「禁じられた言葉」を読む勇気も、口にする勇気すらわれにはない。あの「名」を呼ぶ勇気はない。それさえできれば、われらの迫害者の最終的な死と真の崩壊がもたらされるかもしれないのではあるが。

『ニューイングランドの楽園における魔術的驚異』(抜粋)

悪魔と盟約をかわしたるとおぼしきもう一人の男は、サーモン・ビショップという男で、アーカムのバッド・ウォーター・ロードに仲間の魔術師リチャード・ラッセルと共に住んでいる。このラッセルも、アーカムの、現在われらがメイン・ストリートと呼ぶ道路の西のはずれに住んでいた。この二人は地下に棲む悪魔を崇拝していたといわれ、悪魔と協定を結び、決して死ぬことがないといわれている。

アーカムの町を築いた初期の開拓者の中で現在まで生存している人々の中には、サーモン・ビショップを覚えている人々がいる。彼らによれば、ビショップは長い年月を生きてきたにもかかわらず、全然年をとらないのだということだ。邪悪な協定によって、年月と共にただ腰が曲がっていくだけで、老いることはないのだと人々は言う。また二人の埋葬場での邪悪な行為について証言する目撃者もいる。渾身の力をこめて復活を計画しているのだということだ。

アーカムの市民はビショップに対して立ち上がった。彼を誘拐して殺したと言っている者もいる。死体は森に埋めたとも、袋に入れて重りを詰め、ミスカトニック川に投げ捨てたともいわれている。1752年のことだという話である。ラッセルは逃げ去り、以後うわさを聞かない。

ビショップの橋、焼ける

ミスカトニック川の川上流 6.4km のところに架かっている屋根付きの橋は、今はもうない。先週の嵐で、古くなっていた橋が雷に打たれ、屋根を全部と、橋床と橋げたの大部分が焼けてしまったのだ。

この橋は 1750 年ごろに架けられたといわれているが、今や中央の土台石と進入路しか残っていない。保安官は橋へ至る道路を閉鎖している。

橋はもともと、橋を建設した豪農の名前をとってボウアン橋と呼ばれていたが、その後、町の人々はビショップの橋と呼ぶようになった。

町の人々によれば、この橋には雷が落ちやすかったという。最近では老朽化が進んだため、郡は馬と荷馬車の通行を禁止していた。

川の南岸からは、まだ立っている中央の土台石に、意味不明で由来も不明な象徴が付いているのが見える。

近ごろはこの橋の必要も減っており、再建されることはないと思われる。

アーカムの著名人

連載シリーズ E. ラファム・ピーボディ

サーモン・ビショップ、魔術師

18 世紀の中ごろ、サーモン・ビショップは魔術師だとうわさされ、アーカム西部の農民が被ったさまざまな災害の犯人だと見られていた。その他にも彼に関する暗いうわさがささやかれていたが、大っぴらに弾劾されたことはなかった。

ビショップの隣に住んでいたエリヒュー・フィリップスは、たびたびビショップと言い合っていた。フィリップスの家に脚の不自由な女の子が生まれたとき、フィリップスはそれがビショップのせいだと確信した。ある夜、ダニッチへ出掛けたビショップが帰って来たとき、フィリップスと他の 6 人の男たちが彼を捕まえ、縛り上げ、魔術の印章を頭に巻いた上でつるし首にした。

彼らによると、ビショップは大悪魔と接触するために恐ろしい本を用いていたという。大悪魔との接触によって、ビショップの体は腰が曲がって不自由になったが、その代償に決して死ぬことがない体になったという。

七人の男たちは、頭の印章によって無力になったビショップの体を担ぎ、ミスカトニック川に沿いに北へ運んだ。ちょうど橋が建設中であり、その土台石を置くための穴に、魔術師の体をセメントで埋めてしまった。彼らは土台石にも、ビショップを封じたのと同じ印章を付けた。彼を永遠にそこに閉じ込めておこうとしたのだ。

魔術師の七人の敵は、全員警察に尋問されたものの、誰も告発されなかった。

橋の木道の屋根と壁は 19 世紀の終わりごろには荒れた状態になっていた。1901 年には大きな落雷があり、焼け落ちたまま再建されなかった。町の西数 km の場所に、今でも基礎と中央の土台石だけが残っている。町の人々が言う印が、土台石にノミで刻まれており、今でも見ることができる。この印によって、われわれは魔術師の魔手をまぬがれているのだ!!

この記事のために重要な情報を提供してくださったアーカム在住のニナ・ウィリアムズ・ホープ夫人に感謝。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

アーカム町の歴史 (抜粋)

……そのような人物としてもう一人、背の曲がったサーモン・ビショップがいる。ビショップは彼の先祖たちと同様魔術を使うと非難されていた。彼は町の西郊外のヒル・ストリート (当時はバッド・ウォーター・ロードと呼ばれていた) に住んでおり、強い魔力を持つ魔術師だと言われていた。彼の行動のうわさが人々に疑惑の念を抱かせ、作物の不作や牛がミルクを出さないことなどが、彼のせいとされることも多かった。ビショップはある夜ダニッチから帰る途中で失踪し、その後まったく姿を消した。悪魔がやって来て永遠に彼を連れ去ったのだといううわさが流れた。保安官は皆が納得するような徹底的な捜査を行なったが、容疑者が裁判にかけられるようなことはなかった。ビショップが犯罪の犠牲になったことはほぼ確実と思われるが、遺体は見つかっていない。

(殺人リスト プレイヤー資料 5)

サーモン・ビショップへ

君がこんなに何日も帰って来ないので、フィリップスとその仲間ともに殺されたのではないかと心配している。あいつらがどうやって「踏むもの」を負かすことができたのかは、私には想像もできないが、あいつらの力は相当なものに違いない。だから私は逃げ出すことにするよ。

君がただ遅くなっただけで、殺されてはいないかもしれないので、セイラムの S. O. とプロヴィデンスの J. C. に手紙を書いて私の行く先を知らせておく。私のことを彼らからちゃんと正しく聞き出すようにしてくれたまえ。

彼らは彼ら独得の秘密めいた話し方をするからね。

大切な本と書類は私が持って行く。われわれの目的に関するそれほど重要でないメモのようなものは、川へ持って行って、「住人」にやった。今の再生者はほとんどの部分が生きていたんだが、今日私は大型拳銃で殺しておいた。運ぶには重過ぎるからね。それから、パーソンズ・ポイントの入り口も壊しておいたよ。

最後の真理へ向かって、われわれの関係が今まで通り続くことを信じている。われわれが約束したように、夜と昼を越えた未来までも続くことをね。

ラッセル

(殺人リスト プレイヤー資料 7)
[フルスキャップに書かれたメモ]

筆記者 クラウゼンバーグ

9月14日

明哲なるSer. B.殿へご挨拶申し上げる

貴殿が申されしものを呼び戻すことの度重なる失敗は、おそらくは「塩」が不完全がゆえのことでありましょう。不純なりしゆえか、あるいは呼び掛けの方法が誤りしゆえかも知れませぬ。しかし、拙者にはどうして差し上げることもできませぬ。人をその「本質」から呼び戻すことにおいて拙者の勝利は、はなはだ限られしものであります。とはいっても、そのわずかな成功がもたらせしものは大いなるものであります。

塵を踏むものは黄金より高き報酬を求めます。また、死を克服するにはこれ以外の儀式もあります。彼のものが貴殿に抱く敵意をお忘れなさい。彼のものの記憶は、別の本によれば、その本は手元にありますねが、この世の外のものであるとか。また、同盟は、誓いが述べられ有効となると同時に消え去るとか。3月18日付の貴殿の手紙にお答えいたしますれば、『ナコト写本』には、感嘆すべき記述の羅列の中に、貴殿がおっしゃるがごとき存在のことがほのめかされ、謎めいた事柄が記されております。そのものが兄弟だとすれば、貴殿の兄弟はこの世の山や海よりも古々しさものでありましょう。それは眠るがままにすべきでありましょう。さもないと、悪意あるものが貴殿の周りをうろつくことになりましょう。なにとぞ貴殿が望まれる結果が得られしあかつきには、セイラムのSSおよびプロヴィデンスのJ. Curと連絡をとり、二人にその旨お伝えくだされ。

H

チェックリー館で骸骨発見

警察は事件性を疑う

ロバータ・ヘンリー

チェックリー館の取り壊し作業は、昨日一時中止された。地階のれんがの壁の中から骸骨が発見されたためだ。

ノイズ・ストリート 633 番地にある館は、かつてはイーストタウンのランドマークだったが、現在ではほとんど形をとどめていない。作業員が地階の壁を取り壊していた骸骨を発見した時には、もう建物はほとんどなくなっていた。

発見されたのは骸骨一体分といくつかの身の回りの品だった。警察はそれらをアーカムの監察医であるエフレム・スプレイク医師の指示の下に回収した。スプレイク医師は骸骨は年取った女性のものだが、誰のものかはわからないと述べている。

衣服の断片と装身具も一緒に発見された。

それ以外の骨も地下室にあったといううわさもあったが、警察はそのうわさを肯定も否定もしなかった。取り壊し作業を命じていたバックワース開発会社は、当局による捜査の間は取り壊し作業を一時中止すると発表した。

館の所有者だったジェイソン・チェックリーは、アーカムのチェックリー家の最後の子孫だったが、先週、聖メアリ病院で心不全のため死去した。

かつては大変な資産家だったチェックリー家も今では資産がほとんどないことがわかった。二年前に館はすでにバックワース開発会社に売り渡されていた。譲渡価格は明らかにされていない。バックワースによれば、ジェイソン・チェックリーの生存中はそのまま館に住んでいてもいいという契約になっていたということだ。

警察は地下室での発見物に関し、チェックリーの友人であり、現在は遺言執行人でもあるウィラード・クロスマンに尋問を行なった。クロスマンは現在、心臓発作のため聖メアリ病院に入院中で、医師団は彼への面会を禁止している。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

(夜のしじま プレイヤー資料1)

アーカムに新しい研究所が創設

ジェイソン・チェックリー理事は今日、チェックリー心霊研究所という名称の心霊現象を専門とする新しい施設を開設することを発表した。

この研究所はブラウン・ストリート 623 番地の建物の 2 階に置かれ、蔵書 5,000 冊の図書室、研究用スペース、小さな講義室がある。

来客用の部屋はまだ完成していないが、そこには外部の研究者や講師が生活できる施設も含まれる。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙
(1917年8月28日)

心霊研究所閉鎖

ブラウン・ストリート 623 番地のチェックリー心霊研究所は本日閉鎖された。

副所長のアンドリュー・エスターリッジ夫人は現代人が次第に無神論に染まっていることを批判しつつ、研究所の累積赤字を埋めるため、備品類をオークションにかけると述べた。

研究所の創設者であるジェイソン・チェックリー理事は、図書室の蔵書の一部は売らずに保管する模様だ。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙
(1920年11月23日)

(夜のしじま プレイヤー資料2)

チェックリーの遺言

1906年1月1日

私ことジェイソン・チェックリーはマーセラという名の黒人召使いの死に全面的に責任がある。彼女からひどいことをされて平静さを失ってしまい、怒りに任せてこの両手で締め殺してしまった。

私は地下室に3匹の生き物を隠している。危険な生き物なので、何とか破壊しなければならないものだ。人間に似ているが、人間ではない。同情心を抱くことはない。彼らを破壊する最も確実な方法は、『ナイハーゴの儀礼』という本の284ページに書かれている。その本は私の図書室にある。

神のご加護のあらんことを。

(署名) ジェイソン・チェックリー

チェックリーの日記、抜粋

1905年8月7日: マーセラは承知してくれた。彼女は\$500必要だと言ったが、どうにか払えるだろう。わが愛する子供たちを連れ戻すべをわっているというんだから。使用人たちには二、三日の同休みを取らせた。

彼女の指示に従って、地下の部屋を準備した。

1905年8月8日: 何という恐ろしい日だったろう! 彼女が何をしでかしてくれたかわかったとき、私は怒りでわれを忘れてしまった。彼女の首に手を回し、彼女のニワトリと同じようにその首をひねってしまった。気がついてみたら、彼女は死んでいた。幸いウィラードが助けになってくれる。

1905年8月9日: 棺は今日わが家の霊廟に埋葬された。近ごろはあちこちで葬式が多いから、人々の目を引かないで済むだろう。とにかく何とかしなければ。

マーセラの死体と彼女の品物は隠した。

1905年8月10日: 彼らの食糧は驚くべきものだ。私は定期的に食べ物をやっているが、彼らは私と交渉しようという様子はまったく見せない。彼らは信用できない。

1905年8月11日: 使用人たちを全部やめさせて、彼らの持ち物も全部持っていかせた。地下に三人を置いておくためには、絶対にプライバシーを守らなければならない。あの部屋への入り口を隠すために、地下の壁には板を張るつもりだ。

1905年8月12日: 今日、一人が私に襲いかかった。アダムだった。私が食べ物を入れるボウルを拾い上げようとしたとき、後ろから飛びかかってきたのだ。何とか身をかわして部屋から逃げ出すことができたが、危ないところだった。彼らを野獣として取り扱わなければならないようだ。

1905年8月13日: あの三人を救う可能性があるかもしれない。彼らを復活させたという秘密は隠し通せるだろう。私は残りの人生を彼らを救うことにささげる。今日以後は、この日記には彼らのことには一切触れないことにする。

チェックリーの日記、抜粋

1905年8月今日ロンドンから荷物が届いた。受け取った2冊の本は、思っていたよりいい状態を保っていた。この費用を快く出してくれたミルドレッドにあらためて感謝する。この本で図書室の価値が上がるのは確かだし、私の問題に関係のある情報が含まれているはずだ。

中の一冊『ナイハーゴの儀礼』は、中央アフリカにある古代の聖に彫ってあった物を翻訳したものである。この翻訳を学者たちはナンセンスと笑った。しかし内容がハイチのヴードゥー教との類似性が濃厚であることから見ても、狂人の想像だとは思えないものである。著者の突然の死は謎に包まれている。この本の著者はこの秘密の暗黒の場所をわっている唯一の人周だと言われている。

それからもう一冊は『ドール讃歌』だ。かなり専門的な本で、私は音楽のことはよくわからない。しかし、何か興味のあることは書いてあるだろう。

(夜のしじま プレイヤー資料4)

(イベント2)

ハーパーの森に幽霊

最近、町のすぐ北にあるハーパーの森で幽霊が徘徊していたという報告が三件あった。三名の目撃者とも真夜中過ぎに一人で車を運転していたという。

そのうちの一人、ベンソンのマーケットで働いているブライアン・フォスワースは、幽霊の姿に仰天して、マーケットの配達用トラックをあやうくハーパーの小川に転落させるところだった。

森の中の聖なるインディアン土地付近に幽霊が出るという話は、かなり前からあった。

過去にはこの地域で「幽霊話」がよく報告されたものだが、布をかぶったある少年が容疑者として発見され、事件は一件落着いていた。

若者たちよ、ハローウィンのいたずらにはまだちょっと早過ぎますよ！

——『アーカム・ガゼット』紙

(夜のしじま プレイヤー資料5)

(イベント3)

警察署に押し込み強盗

正体不明の男が昨夜、当直の刑事を倒し、アーカム警察署の奥にある保管室へ押し入ろうとした。

ちょうど警察署の建物に入ろうとしていたもう一人の警官が男を止めようとしたが、容疑者は通りを逃げて行った。犯人は黒人で、やせ型、髪はなく、背丈は180cmほどだったということだ。

ニコラス署長は、この男を見掛けた、あるいはこの男のいる場所を知っている市民はすぐに警察に連絡するよう要請している。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

(夜のしじま プレイヤー資料6)

(イベント4)

墓地に狼籍者

昨夜、一人もしくは複数の人間がクライストチャーチ墓地に侵入し、最近埋葬された棺を掘り返した。今朝になって発見された時には、棺は完全に露出されており、土が墓の周りに積み上げられていた。

棺の封には何か所も傷がついていたが、棺を開けるまでには至っていなかった。

墓守は棺は確かに無事に元に戻されたと言言している。

警察は容疑者を特定していない。警察は学生友愛会によるいたずらが秋にはよく起こるものだと言っている。

——『アーカム・ガゼット』紙

(夜のしじま プレイヤー資料7)

(イベント7)

警察署で謎の事件

長年アーカム警察に勤め、輝かしい業績を上げてきたロバート E. ローガン巡査が、今朝午前5時に警察署内で意識もうろうの状態で見つされた。

警察はまた、奥の保管室に何者かに侵入したと発表した。見つされたものがあるかどうかはまだ不明である。

ローガン巡査は昨夜一人で当直をしていた。現在のところ、警察は事件を内部の問題として扱っているが、ローガン刑事への疑惑はなく、彼に対しては賞賛以外の言葉は聞かれない。読者は覚えているだろうが、ローガン巡査は去年愚かな若者二人をミスカトニック川の深みから勇敢に救出した功労者だ。

見つされたローガン巡査は現在聖メアリ病院で検査を受けている。

——『アーカム・ガゼット』紙

(夜のしじま プレイヤー資料10)

(イベント5)

通行人、襲われてけが

「ジョー」という名前だけしか知られていない男性が、首と顔に裂傷を負って聖メアリ病院に収容された。警察は午前3時57分にこの男がギャリソン・ストリート近くのリバー・ストリートを悲鳴を上げて助けを求めながら走っているのを見つけた。しかし男を追っている者はいなかった。彼はすぐに緊急治療室に入れられた。

ジョーは青白い若い女の子に襲われたと話している。最初、彼にキスしようとし、それからいきなり首に噛みつけたのだということだ。

男は自分の住所を言えなかった。警察は路上生活者のこの男が酒を飲んで眠っていた間に、ネズミか捨て犬に襲われたのだらうと推測している。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

(夜のしじま プレイヤー資料8)

(イベント8)

ボーデン・アームズ・ホテルで乱暴

警察は今朝ボーデン・アームズ・ホテルから通報を受けて駆け付けた。メイドのルビー・ランコウィッツが3階の部屋が不道徳で流石な遺体を発見したのである。

衝撃的なことに、警察は布に包まれた二つの人間の首を見つけた。スプリング医師によると、手首は死後一週間ほどたった死体から切断されたものであるという。誰の死体であるかは不明である。

部屋中には切り刻まれた山羊の体がばらまかれており、壁と天井には意味不明の印章のようなものが描かれていた。

警察では、この部屋を借りていたマーキス博士という人物がすでにアーカムを逃げ出したあとだと見ている。

その人物は背が高く、ひときわ目立つ体格の黒人だということだ。話し方にフランスなまりがあり、明らかに教育のある人間だったということだ。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

(夜のしじま プレイヤー資料11)

(イベント6)

倉庫で殺人

今朝早く、出勤してきた労働者がラッキー・クロバー運送会社の近くで男の死体を見つけた。

検死官は死体は暴力による犠牲者のもので、死因はショックあるいは出血多量によるものであると述べた。まだ確認はされていないが、犠牲者の顔とどのについていた傷は大変ひどいもので、顔がわからないほどだったといううさもある。

警察は引き続き捜査を進めている。

——『アーカム・アドヴァタイザー』紙

(夜のしじま プレイヤー資料9)